

武蔵国分寺跡資料館だより

Musashi Kokubunji Temple Remains Museum Newsletter

編集・発行・印刷

見る／学ぶ／訪ねる／
武蔵国分寺跡資料館

Musashi Kokubunji Temple Remains Museum

【住所】 〒185-0023 東京都国分寺市西元町1-13-10
【電話】 042-323-4103 【FAX】 042-300-0091
【E-mail】 museum@city.kokubunji.tokyo.jp
【HPアドレス】
http://www.city.kokubunji.tokyo.jp/shisetsu/1733/009819.html

2014.2
第17号



武蔵国分寺跡講堂整備の着手

市では、平成23年度より史跡武蔵国分寺跡(僧寺地区)を歴史公園として活用するための第一期整備工事に着手しており、平成25年度には、その3年次目として、おもに講堂跡の基壇復元工事を実施しています。

講堂基壇の外装には瓦が積まれていたことが発掘調査により判明しており、今回の工事では、その様子を復元することとなります。講堂基壇の西面は、平成26年度も継続して市民参加による整備を行う箇所として、鳩山町で国分寺市民が作成した瓦を使用する予定です。



写真 講堂整備風景

殿ヶ谷戸北遺跡第5次調査の成果

国分寺市内には、武蔵国分寺跡をはじめ58箇所の埋蔵文化財の包蔵地があります。国分寺市教育委員会ではこうした包蔵地内で開発が行われる場合、埋蔵文化財の発掘調査等を行い、文化財の保護に努めています。平成25年度の調査を振り返ると、武蔵国分寺跡の調査が3件、恋ヶ窪遺跡の調査が1件、多摩蘭坂遺跡の調査が1件、殿ヶ谷戸遺跡の調査が1件、殿ヶ谷戸北遺跡の調査が2件実施されました。武蔵国分寺跡の調査では歴史時代の大規模建物の柱穴を確認し、恋ヶ窪遺跡での調査では縄文時代の集落の広がりを知るための資料が得られました。特に殿ヶ谷戸北遺跡では旧石器時代の遺跡が調査され貴重な成果が得られました。

今回はこの殿ヶ谷戸北遺跡における第5次調査についてご紹介しましょう。殿ヶ谷戸北遺跡は南町一丁目8・9・12付近に所在し、国分寺崖線の南斜面に位置しています。調査の結果2箇所の礫群(拳大の礫が平面的に集中した遺構です。これらの礫は非常に良く焼けており、いわゆる石蒸し料理をした大昔の人々の調理場ではないかと考えられています)と1箇所の石器製作地点(大昔の人々が当時の主要な生活用具であった石器を作った場所です)が発見されました。発見の様子を少し詳しく見てみましょう。2箇所の礫群は、現在の地表面から約40cm下の関東ローム層中で発見されました。それぞれ砂岩を主体とした良く焼けた礫が直径約2mの範囲に広がっていました。この場所で人々は調理をし、食事をしたのでしょうか。1箇所の石器製作地点は、さらに深い約1.8m下の関東ローム層中から発見されました。これは5個のチャートという石材の石核(石器を作るための

材料となる石・写真①の右側の黒い石)と2個の叩き石(石核を割るための石・写真①の左側の白い石)が集中していました。特にこの5個の石核は接合して(石どうしをくっつけることです)、1個の川原石(大人の拳大の大きさです)に復元されました。このことは、大昔の人が、まさにこの場所で石を打ち割った現場であることをよく示しています。

このように、調理をしたり石器を作ったりして、当時の人びとの生活の痕跡が判る地層のことを「文化層」と呼んでいます。今回の調査では深さを違えて2枚の文化層があったことが判りました。礫群が発見された層を「第1文化層」とし、年代は約1万6千年前。石器製作地点が発見された層を「第2文化層」とし、年代は約2万5千年前の所産と考えられます。

市内には「多摩蘭坂遺跡」、「花沢東遺跡」、「日影山遺跡」等旧石器時代の遺跡が多く発見されていますが、主に国分寺崖線に沿って分布しており、これらの遺跡からも同じような深さの関東ローム層の中から複数の文化層が発見されています。当時の人々の生活は国分寺崖線に沿って、獲物を求めて移動する生活だったのでしょう。

(上敷領 久)



写真① 石器製作地点

本町三丁目所在旧家(小柳家)の有形文化財調査について

1 はじめに

本町三丁目所在の旧家小柳家は、国分寺駅北口駅前再開発事業により移転することとなりました。移転に先立ち、まずは緊急に建造物および所蔵資料の現状を把握するための調査を行い、さらに資料を保存して概要を知るための目録作成を行うことになりました。以下に、調査の概要と途中経過を報告します。

小柳家は、国分寺駅北口の正面で、駅前商店街の入り口の角地に所在し、柳寿司という寿司屋を構えています。昭和44年(1969)に店舗の全体を寿司屋に改装する以前には、旅館を営んでおられましたが、改装後には旅館営業を廃止して現在に至っています。

2 店舗と蔵の建物の様子を見る

敷地内の建物は、店舗と蔵に分かれています。店舗は、当初2階が旅館用の客室に仕切られていましたが、寿司店に改装した後は寿司店用の座敷・客席に改められました。旅館の面影は残されていないのですが、勝手口の方には、旅館営業当時の出入り口がそのまま残り、2階の客室に上がる階段も当時の状態をよく残しています。店舗に隣接して2階建ての蔵が建っていますが、蔵は改築を受けることなく、創建年代は棟札の銘文から、明治37年(1904)とわかりました。蔵の内装は、入り口を入れて左側に押入れ型の棚が備え付けられており、旅館で使用する物品や調度品、家財道具類を収納する内蔵としての機能を持っています。蔵の2階にも取り付けの棚がありますが、この棚の表面には「御休所柳屋」と大きく記してあり、端の形状が雲形にあしらわれていることから、実は看板であったものを棚板に転用していることが解ります。このように、店舗は新しく改装されているものの、明治以来、駅前北口正面で、旅館・御休所・寿司屋を営んできた様子を見ることができま

3 店舗と駅前の風景をみる

店舗の看板には、他に「飲料氷販売所」と表記するものもあり、かつてのお休み所としての営業の在り方を伝えますが、他にも、紙製の弁当箱やお弁当の包装用、またはお料理の掛け紙に使用した包紙も見られます。例えば、大正11年(1922)に国分寺駅まで中央線が電化されたことを祝って「祝電車開通」と書いて電車の絵柄をデザインしたもの、店名に由来する枝垂れ柳の絵柄に「御旅館 御料理」「御寿司 御弁当」「柳屋」と書いた定番タイプのもの、桜樹に桜吹雪を描いて「旅館 和洋御料理 御弁当 寿し」と書いて小金井桜の観桜期に使用したものなどがあります。様々な弁当包紙の絵柄や表記からは、桜の季節やイベント、行事に合わせて駅前がにぎわいを見せていた様子をうかがうことができます。

駅前正面に立地する柳屋と国分寺駅の関係性を物語る資料もみられます。国分寺駅と柳屋で取り交わした「請書

には、「観桜期間中国分寺駅構内工天幕借用営業ノ事」として「乗降客ニ対し立ち寄りノ方無料ニテ茶ヲ差出ス事」とあり、小金井桜の見物に駅の利用客が増加する繁忙期には、柳屋が駅構内ヘントを張って仮店舗を出しており、駅との取り決めで、駅の利用客に無料で茶を出すようにしていることが解ります。資料と蔵の建物調査を合わせてみることで、蔵の棚板に転用された看板などは、駅の繁忙期に、柳屋が駅構内の仮店舗、または駅前店舗でお休み所を表示するためにこれらの看板を掲げていた光景が目に見えます。

また、現在はタクシー乗り場となっている国分寺駅北口のロータリーは、明治から大正・昭和初期にかけて人力車の乗降場所になっていて、その人力車の営業や車夫を柳屋が管理しています。国分寺駅を基点にして、北は小平から南は国分寺址や府中、さらには多摩川を越えた関戸までが人力車を運行する営業範囲だったようです。

他に、たばこ屋営業の資料があり、たばこ専売局の管理のもと、たばこの販売数量や銘柄の指定の指示を受けていた状況が解ります。なかには、大正12年(1923)に発生した関東大震災の復興のために、復興貯蓄債券をたばこ屋で取り扱う指示があり、大蔵省などの官吏を許称してこの債券を販売する行為への注意を促す書類も見られます。

現在、調査資料の総点数は700点程を数えますが、詳細な調査による全体像までは示せておりません。明治の国分寺駅開業以来、駅前北口正面でお休み所や旅館、寿司店などの営業を続けてきた柳屋の資料調査からしか知りえない、様々な駅前の在り方について、調査成果の一部をお示ししました。既に建物は解体されておりますが、今後も更に調査を進めて調査報告書としてとりまとめた成果を報告する所存ですので、よろしく願いいたします。

(中元幸二)



旧家小柳家遠景(南東から)



甲武鉄道開通当時の国分寺駅北口前
柳屋（小柳喜也氏提供）



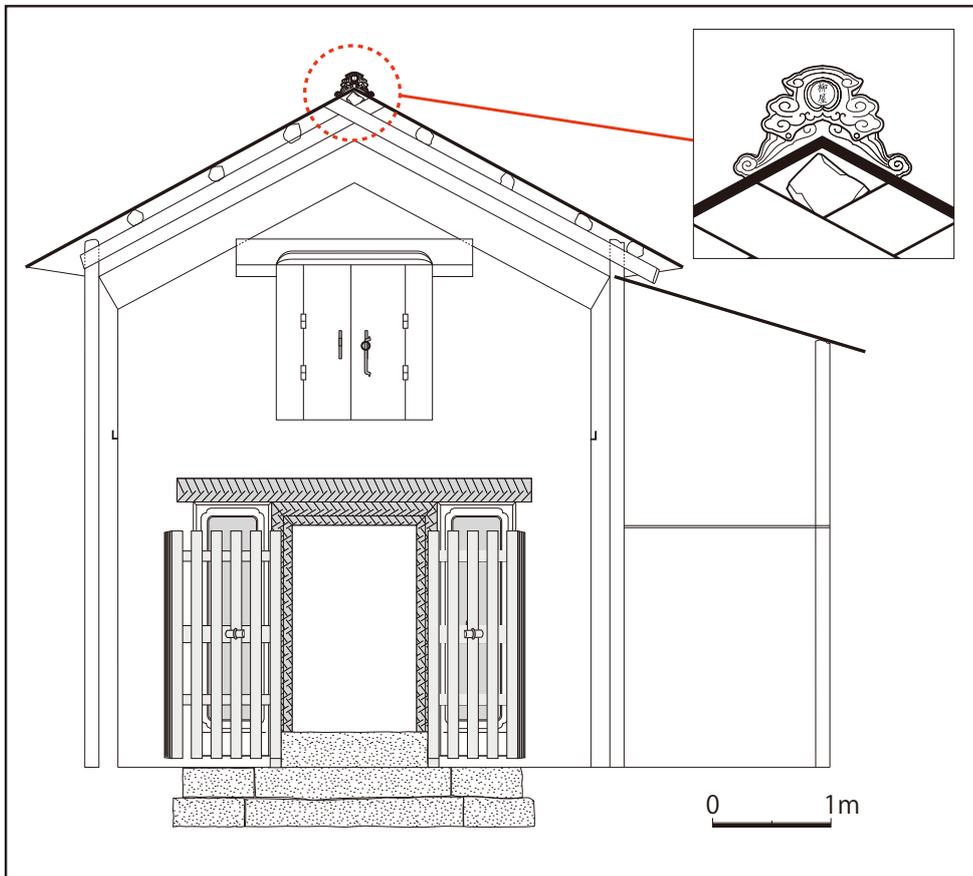
旅館時代の裏口（北から）



土蔵2階南東看板転用棚（北西から）
表『御休所 やなぎ屋』、裏『待合 御休所 柳屋』



お弁当掛け紙



土蔵正面図と『柳屋』と銘のある鬼板

今年の干支は午年です。午年にちなんで馬に関する馬頭観音の石碑についてご紹介します。馬頭観音は、その名の通り馬を頭に冠した観音菩薩で、石碑は様々な地域の路傍に見られます。この石碑はどのような理由で建てられたのでしょうか。

昭和 20 年代頃まで、馬は畑や田を耕す農耕馬や物資を運搬する駄馬などとして人々に飼われていました。写真①は昭和 30 年頃の元町付近で行われていた田起しの様子です。

人々の暮らしを支えた馬がこの世を去ったとき、その馬が成仏できるよう、魂を鎮める目的で、人々は馬頭観音の石碑を建てていました。

また、馬が道中で急にいなないたりすると、付近に漂っている悪い霊が馬に取りつく予兆とし、悪霊から解放するために守護神である馬頭観音をその場に祀ったという例もあります。いつの頃からか「守護」「防ぐ」という意味あいより、邪悪なものがムラに入らないように集落の境界などに置くようになり、あるいは旅人が行く道中の標にもなりました。

石碑は村の名主などの富有人が施主になったり、多くの村民から喜捨を集めたりして造立されました。国分寺市内には現在十数基の馬頭観音の石碑が残っていて、当時の人々の馬に対する信仰を石碑の形で見ることができます（写真②）。



写真① 春の田起し（小柳博行氏提供）



写真② 馬頭観世音 台座正面「當村 施主 本多」 右面「文政七（1824）申年七月廿三日」（南町・殿ヶ谷戸庭園内）

武蔵国分寺跡資料館ご利用案内



- 交通のご案内 ※駐車場はありません
- 電車 ○JR国分寺駅下車／徒歩約20分 ○JR西国分寺駅下車／徒歩約15分
- バス ○国分寺市循環バス『ぶんバス』日吉町ルート「泉町一丁目」下車／徒歩約8分
○国分寺駅南口より「京王バス」系統番号く寺83・く寺85乗車「泉町一丁目」下車／徒歩約8分

■ 開館時間

午前9時～午後5時（入館は午後4時45分まで）

■ 休館日

毎週月曜日（祝日・振替休日の場合はその翌日）
年末年始（12月29日から1月3日まで）
※展示替えなどで臨時休館することがあります。

■ 入園料

資料館に入館するには「おたかの道湧水園」への入園料が必要になります。（入園券は史跡の駅で販売）
一般……………100円（年間パスポート1,000円）
中学生以下……………無料

【入園料の減免規則があります】

- 学校の教育活動で生徒（中学生を除く）、学生及び引率の教職員が入園するとき〔事前（5日前まで）に減免申請書の提出が必要です。〕
 - 身体障害者及びその介護者が入園するとき〔発券窓口の史跡の駅で身体障害者手帳等の提示が必要です。〕
 - その他教育長が特別の理由があると認めるとき〔事前（5日前まで）に減免申請書の提出が必要です。〕
- ※減免申請書は、国分寺市のホームページからダウンロードできます。



モバイルホームページ
QRコード